

# レベル7！最悪の事故からの2年

2013・3・18

資料室報No.117

## 「美しい国日本」から「企業が活躍しやすい国」

事故から二度目の春、<sup>な</sup>風いだ日の福島の海はとても穏やかな表情となる。昔から春の海は<sup>ほうじょう</sup>豊穡であり、漁を営む人々にとっての春の浜は、いつも活気に<sup>あふ</sup>満ち溢れるはずでした。あの事故さえ無ければ！です。

今なお 15 万余の人々が放射能に追われ、仕事や家さえ奪われてしまいました。全国各地に避難する生活を余儀なくされています。

豊かであった海は決して中和することはありません。人工の放射性物質に汚されたままです。

今も福島第一原発の港でとれた「アイナメ」などからは、なんと 70 万ベクレルもの放射性セシウムが検出されているのです。

このような事態にもかかわらず安部首相は原発について「安定的なエネルギー供給という観点から必要である」との姿勢を強めています。しかも事故原因さえまだ解明されていないにもかかわらず、強引に推し進めようとしているのです。

実際に 2 月 28 日の国会での施政方針演説で、これからの原発政策について次のように述べています。

すなわち「長引くデフレからの脱却に加え、エネルギーの安定供給とエネルギーコストの低減に向けて責任あるエネルギー政策を構築してまいります。東京電力福島第一原発事故の反省に立ち、原子力規制委員会の下で妥協することなく安全性を高める新たな安全文化を作り上げます。その上で安全が確認された原発は再稼働します」と、原発の再開・再稼働の意思をあらわにしているのです。

さらに首相は「省エネと再生可能エネルギーの最大限の導入を進め、出来る限り原発依存度を低減させていく」と述べてはいますが、しかし「安全」や「依存度の低減」は<sup>ていげん</sup>建前でしかなく、その<sup>ほんね</sup>本音は施政方針で「世界で一番企業が活躍しやすい国をめざす」と述べているように、まるで企業が活躍しやすいように原発が必要と、述べている事を見逃してはなりません。(施政方針演説の全文は 3・1 朝刊各紙に掲載されています)

一体「世界で一番企業が活躍しやすい国」とは、なんと露骨な表現でしょうか！  
あのおぞましい事故によって、幾多の人々が仕事や家を奪われ、生活が破壊されてしまったにもかかわらず、しかもその事故の原因さえ明らかにされてはいないのです。しかし首相は、なんと「世界で一番企業が活躍しやすい国」とするため

に原発政策の推進を言明しているのです。

しかしこれこそが安倍自民党政府の本音なのであろうか！と思います。

そればかりではありません。更に3月6日の参議院本会議では「…安全と認められた場合に再稼働を進める。しかがって2030年代に原発稼働ゼロにする前政権(民主)の方針はゼロベースで見直す」と切って捨てています。

ところで安倍首相は、6年前の第一次安倍内閣の際には「美しい国日本」を<sup>ひょうぼう</sup>標榜していましたが、しかしその「美しい国」が最悪のレベル7となり、放射能に強く汚染されたのです。にもかかわらず今度は「美しい国」ではなく「世界で一番企業が活躍しやすい国」と述べ、そして「安定したエネルギーの供給やコストの削減が必要だ」としているのです。

こうした観点から、今や世界的な脱原発の<sup>ちやうりゅう</sup>潮流に<sup>さか</sup>逆らって、原発推進を号令しているのです。

さて本題の事故について、国際的な事故の評価尺度によると最悪のレベル7とされた福島第一原発事故からすでに二年の歳月が流れ、この間に設置された四つの事故調査委員会(註一1)はそれぞれの事故報告書を明らかにしてはいます。

しかし福島第一原発がレベル7という最悪の事故となって、広い範囲にわたって放射性物質をまき散らしました。大地と海と空を深く汚し、人々の生活を破壊するばかりか、そこに住む事さえ不可能にしてしまったのです。

そのことに対する社会的な責任、あるいは企業責任が明らかにされているわけではなく、<sup>かんじんかため</sup>肝心要の事故の原因は明らかにされてはいないのです。

けれども私たちは、各事故報告書に示されている恐ろしいまでの数々の現実に注目しなければなりません。

例えば事故によって一体どのぐらいの放射性物質・放射能が、空と海と陸にばら撒かれたのであろうか！という事などは極めて重要だからです。

事故報告書などに示される現実(数値)などから、改めて「福島第一原発事故とは何か？」を問う主体的な立場からそれを見たいと思います。

**註一1 四つの事故調査委員会** 事故調査委員会が報告書を明らかにした順に示すと

民間事故調査委員会 2012・2・27 最終報告書

東電事故調査委員会 2012・6・20 最終報告書

国会事故調査委員会 2012・7・5 最終報告書

政府事故調査委員会 2012・7・23 最終報告書 ※中間報告は2011・12・26

## 汚された海

事故二周年を前にした2月28日、東電は「福島第一原発の港湾内でとれた魚(アイナメ)から、魚類では過去最大となる1kgあたり51万ベクレルの放射性セシウムを検出した」と発表しています。

これは国が定めている一般食品の基準値（1 kgあたり 100 ベクレル）の 5100 倍にも相当するものでした。

もしこの「アイナメ」を 1 kg 食べた場合、その人の内部被ばく線量は約 7.7 ミリシーベルトになるという線量であり、このほかムラソイという魚からも 27 万 7000 ベクレルを検出しています。（2013・3・1 東京新聞）

さらにその後、70 万ベクレルもの汚染されたアイナメが捕獲されました。

このような報道からも、海に接する原発の港や海が今も高濃度に汚染されていることが判明します。

朝日の「天声人語」でも、これを話題にしていますが、かの「おさかな博士」などは、このアイナメについて、一体どのように語るのでしょうか？

さてこうした海の汚染ですがこれについて東電は、事故後に「電力中央研究所」などの協力で、放射性物質が海洋に放出された場合の放射性物質濃度を試算するプログラムを用い、海水のモニタリングデータを基に試算しています。

それによると、海に放出された放射性物質の線量推計は、

ヨウ素 131 が約 1.1 テラ（註-2）セシウム 137 が約 3600 テラベクレルであったと 2012・5・24 日に公表しています。（政府事故調査委員会報告書）

このように海への汚染によって、アイナメなどの魚類が著しく汚染されたことが判明するでしょう。

さらには 2011 年 4 月 2 日～3 日にかけて、第一原発から流れ出した約 500 トンの高濃度汚染水があり、その汚染水の放射能が「ヨウ素 131 が 2808 兆ベクレル、セシウム 137 は 936 兆ベクレル」にも達したことを最近明らかにしている週刊誌もあります。（週間金曜日 2013・3・1 号）

では一体どのくらいの量の放射性物質が、海や空や大地に放出されたのでしょうか？これについて以下「事故報告書」などから改めて把握することとします。

註-2 テラ 1 兆 10<sup>12</sup>倍を表す ギリシャ語

## 放出された放射性物質の量

事故に関して複数の事故報告書がすでに公表されていますが、しかし核心的な事故原因の究明がなされているわけではありません。

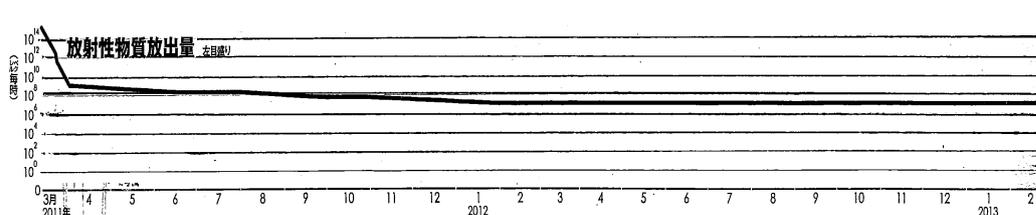
たしかに事故の現実については詳しく調べてはいますが、原因の究明についてはまだなされていないようです。

たとえば実際に原子炉が炉心溶融していることは判明していますが、具体的に、いつ、どこが、どのような状態で溶融したのか？あるいは溶けた核燃料棒がどのような状態になっているのか？あるいは高温で穴が開いたとされる压力容器や核用容器の様子、破損箇所や破損状況などさえも、未だに正確に把握することが出来ないのです。つまり具体的な状況がわからないのです。

それは、依然として事故現場は人を寄せ付けないほど、致死量に達する高いレベルの放射能が充満しているからです。

したがって壊れた原子炉の状況がわからないために、事故の原因究明は困難を極めている状況なのです。

現在でも相当高レベルの放射性物質が放出され続けているのですが、その状態を示すデータとして、下に示すようなグラフがあるので参考までに掲載しておきます。



このような現実に踏まえつつ、以下、四つの報告書に示される放出された放射線物質について見ておく事とします。

## 政府事故調査報告書に示される総放出量

すでに明らかにされている政府の事故調査報告書に示されている推定総放出量は以下のようなようです。

**a** 保安院による推定値は、2011・4・12 に公表され、更に同年 6 月 6 日に、新たな試算による推定値を公表し、2012・2・1 に、ヨウ素 131 が 15 万テラベクレル、セシウム 137 が 0.82 テラベクレルであり、ヨウ素換算では 48 万テラベクレルと公表している。(※ヨウ素換算とは、セシウム 137 のベクレル数×40 によって算出する)

**b** 原子力安全委員会による推定値は、同委員会が JAEA (日本原子力研究開発機構) の協力を得て、モニタリングデータ、SPEEDI (緊急時迅速放射能影響予測ネットワーク) を用いて第一原発周辺の放射性物質の積算線量を推計した。その過程において大気中に放出された放射性物質の推計値は、ヨウ素 131 が 15 万テラベクレル、セシウム 137 が 1.2 テラベクレルで、これをヨウ素換算すると 57 万テラベクレルと 2011・8・14 に公表しています。

さらに原子力安全委員会は 2011・3・15 日以前の環境モニタリングデータが得られたとして再び解析を行い、ヨウ素 131 が 13 万テラベクレル、セシウム 137 は 1.1 テラベクレル。ヨウ素換算では 57 万テラベクレルと 2011・8・24 に再度公表している。

**c** 東電の場合 東電はDLANA (大気中に放出された場合の空間線量率を計算するプログラム) を用い、モニタリングデータ、気象データ等を基にして計算した推計値は、ヨウ素 131 が約 50 万テラベクレル、セシウム 137 は約 1 万テラベ

クレル、ヨウ素換算では約 90 万テラベクレルと発表しているのです。(以上 a ~ c の発表内容はすべて「政府事故調査委員会最終報告書」から引用した)

## レベル 7 の放射性物質とは

さて論じなければならない事は、サリンよりはるかに恐ろしいと言われ、その及ぼす影響によって、長くあるいは半永久的に人も住めなくなる放射性物質の放出についてです。

例えば 100 万 k w の出力を持つ原発は、一日に放射性物質 (死の灰) を 3 k g も生成する。一年では  $3 \times 365$  で約 1 トンの死の灰を生産する。(「福島第一原発事故の教訓」熊取からの提言 小林圭二 世界書院)

日本ではいま一基で 100 万 k w 以上の出力を有する原発は 22 基、うち最高は刈羽原発の 6・7 号機はそれぞれ 135 万 6 千 k w と巨大です。日本の原発の総合計出力は約 4500 万 k w なので、生じる死の灰は年間で約 45 トンにもなるのです。

さて事故によって危険極まりない膨大な量の放射性物質がばらまかれたという事を基点として、さらに考えて見なくてはなりません。

そのために事故についての国際的な尺度などを参考にしながら、事故の重大性について認識したいのです。

原発など原子力施設で発生した事故や故障などの影響を判断するために I A E A (国際原子力機構) は「国際原子力事象評価尺度」(註一 3) を定め、それによると原発事故のレベルについて、低い順から 0 ~ 7 とランクされ、レベル 1 ~ 3 を「異常な事象」レベル 4 ~ 7 を「事故」としています。

尚、0 レベルは尺度以下とされている。さらに事故に相当するレベル 4 ~ 7 は次のように区分されています。

レベル 4 「原子炉の炉心はかなり損傷して、一般住民に数ミリシーベルトの被ばくがある場合」

レベル 5 「炉心に重大な損傷があり、数テラベクレル相当の放射性物質が外部に漏れる事故」

レベル 6 「漏れた放射性物質が数千テラベクレルから数万テラベクレル相当の場合」

レベル 7 「それ以上の場合」

とされています。この「評価尺度」は、住民の被ばく、炉心の損傷または重大な損傷、放射性物質の外部への放出量、などを尺度としていることが判明するでしょう。福島第一の場合、住民の被ばく、炉心の損傷が 3 基、放出された放射線量の大きさ、などから最悪のレベル 7 とされたのは当然であると言えます。

実際に福島第一原発事故の場合、当初保安院などは「レベル 5」としていたのですが、しかし 4 月 12 日になって事の重大性からレベルの二段階引き上げて「レ

ベル7」としているのです。

I A E A の尺度でレベル7の場合、放出量が“数万テラベクレル”以上とされているように、福島第一の場合この数値を一桁上回ることから、保安院はレベル7に引き上げたのです。

参考までに述べれば、史上最悪とされているチェルノブイリ事故(1986・4・26)では520万テラベクレルとされています。だから保安院などは「同じレベル7でも放出量はチェルノブイリの約1割である」などと述べているのです。

尚、事故レベルの二段階引き上げの際の記者会見で、保安院と原子力委員会はおおよ次のようにのべています。すなわち

- ・「放出された放射性物質の推定値はヨウ素換算で37万テラベクレル(保安院)63万テラベクレル(安全委)これはチェルノブイリの約1割に相当」
  - ・「このほかに海洋や原発敷地内にとどまる放射性物質がある」
  - ・「3・15に起きた2号機の格納容器破損で放射性物質が一気に放出された」
  - ・「ランク引き上げによる事故現場での作業制限や、避難区域の変更もない」
- などと記者会見で述べているのです。

**註一3** 参考として「国際原子力事象評価基準尺度」と事故例について示すと、

レベル7	深刻な事故	チェルノブイリ原発事故(1986)
レベル6	大事故	
レベル5	所外へのリスクを伴う事故	スリーマイル島原発事故(1979)
レベル4	所外への大きなリスクを伴わない事故	JCO臨界事故(東海村1999)
レベル3	重大な異常事象	スペイン、ハンデスロ火災事故(1989)
レベル2	異常事象	美浜2号炉損傷事故(1991)
レベル1	逸脱	もんじゅナトリウム漏れ事故(1995)
レベル0	尺度以下	多数!

レベルの評価は、事故・故障を起こしたI A E A加盟国の機関が自ら実施してI A E Aに報告する。日本の場合、経済産業省原子力安全・保安院がレベルを暫定評価し、経済産業省の総合資源エネルギー原子力安全・保安院のI N E S評価小委員会が正式に決める。昨年暮れに新たに原子力規制委員会が設置されて、原子力安全委員会や保安院などは改組されている。

## アベノミクスと原発

自然災害が極めて多く、いつも周期的に大地震や津波に襲われる私たち。狭い国でありながら、しかも活断層(註一4)の真上に数多くの原発がひしめいているのが現実の姿です。

こうした事実からも福島第一原発事故は、想定外の事故では決してなく明らかに人災であると思います。

つまり周期的に巨大な地震や津波が必ず襲うことがわかっていながら、危険な

場所に多数の原発を造っていることこそ問題なのです。

あの事故から 2 年も経<sup>た</sup>っていながら、事故の原因やあるいは膨<sup>ぼう</sup>大な放射性物質が放出された原因については、依然として明らかにされていないのです。

それにもかかわらず安倍首相や経団連は、原発を「エネルギーの安定供給やコスト」を強調して、なんと「世界で一番企業が活躍しやすい国を目指す」などと施政方針演説で述べており、これに経団連などはもろ手を挙<sup>あ</sup>げて歓迎しているのです。

しかも原発事故の原因が明らかになっていないにもかかわらず、「原発をゼロ稼働にする前政権（民主党）の政策をゼロベースで見直す」と高言しているのです。

それは原発（核）の持つ強力なエネルギーこそ、権力者にとっては極めて魅力的な存在なのではないでしょうか！

いまアベノミクスという言葉が盛んにマスコミなどにもてはやされ、これに一番気を良くしているのが安倍首相です。

それは、イギリス史上初めて女性首相となったのが前サッチャー首相は、大英帝国と言われたイギリスが陥<sup>おちい</sup>った英国病を打開するために取り入れたのが新自由主義です。それによる数々の政策で英国病を克服したサッチャーイズム。あるいは米レーガン大統領（第 40 代）が米経済の建て直しを図るための政策（物価安定・規制緩和・減税・小さな政府）で米経済を立て直したと言われる“レーガノミクス”。それにあやかるように安倍首相は日本が陥<sup>おちい</sup>っているデフレを伴う長期的な経済停滞を打開するためのアベノミクス（三本の矢）なる経済・金融政策が経済界から盛んにもてはやされているようです。

しかし日本経済の再生のため、その原動力に原発が据えられるとしたら明らかに間違いでしょう。

つまり「安全々」と口にしながら、福島第一原発事故の事故原因さえ明らかに出来ないのであり、事故から学ぶことも出来ないまま、危険な原発のエネルギーに依拠しなくてはならない経済政策などは、極めて不安定なものだからです。

私たちは「世界で企業が一番活躍しやすい国」などと、国会で述べて憚<sup>はばか</sup>らない安倍政府に対して、今こそ、断じて否！と言わなくてはなりません。

私たちは「企業が一番活躍しやすい国」などを求めてはいません。

私たちに必要なのは、放射能に怯<sup>おび</sup>えないで安心して暮らせる国、これこそ必要なのではないのでしょうか。

**註一 活断層** 過去百数十万年にずれたことのある断層。将来も活動する可能性があるもの。地形のずれが残っていることなど、近い過去に活動した痕跡が存在。断層の活動は震源となるので活断層の証左は地震研究上重要となっている。（広辞苑）